

北方官話の色彩語彙體系

遠 藤 雅 裕

はじめに

漢語の色彩分類についての論考の多くは、「白・黒・赤（紅）・青（藍）・黄」を主要色とし、「緑・紫」などを付隨的に扱うという、いわゆる五色に基づいたものが一般的であるように思われる（新村1942, 湊1980など）。では、このような伝統的な色彩の分類方法は、現代語についても妥当なのだろうか。本論では、Berlin & Kay 1969（以下B&Kと略）の基本色彩語彙（Basic Color Terms, 以下BCTと略）の通言語的な研究⁽¹⁾を参考にし、現代漢語北方官話における色彩分類を明らかにしたい。

1. 従來の現代漢語色彩語彙の研究

現代漢語の色彩語彙について、個別の語彙の研究はなされているものの（王曙光1986, 符淮青1988・1989など）、その体系的な研究はごく限られたものとなる。そのなかで、現代漢語の色彩語彙を體系として最初に扱ったのは B&K 1969 である。

B&Kの調査⁽²⁾によると、官話（Mandarin）のBCTは「白・黒・紅・緑・黄藍」の6語である。この體系は、彼等が假定した色彩語彙の普遍的なコード化の序列⁽³⁾第5段階に相當することになる。

問題は「灰」についての扱いである。B&Kは「灰」が物質の「灰燼（ash）」を同時に指示することから、彼らの基準⑥（色彩と同時に物質を指示しない）に抵觸すること、また「灰」を基本的とする調査報告（McClure）と3次的なものとする報告（Madarasz）があり、研究者によりその評価が一定しないことを指摘し、これをBCTから外している。また、先に述べたように、現代漢語の色彩語彙體系はコード化序列の第5段階であるが、「灰」をBCTと認めた場合、

その出現が早すぎることを指摘している (B&K 1969 では、grey の出現は最終の第 7 段階である)。しかし、この問題はコード化序列の制限緩和により、grey は第 3 段階から第 7 段階の間で出現するものとして解決可能であることを付け加えておく (Kay 1975 など)。目下の問題は、その出現する段階ではなく、「灰」を BCT と認めるか否かである。

B&K の研究は、それぞれの色彩語彙の文法的特徴というような細かな特質まで立ち入った検討は加えていない。これは、98 という多数の言語を扱っているため物理的に困難であり、また、彼らの目的が普遍性の発見であったため、個別性への配慮が欠けていたためであろう。しかし、文法的視點などからも BCT を捉えようという試みは、個別言語の研究では當然考えられる⁽⁴⁾。このような視點から漢語の色彩語彙について研究を試みたのは大河内 1982 が最初で、文法的特徴から色彩分類の階層性が窺えることを示唆している。大河内は、「很__」「大__」「鮮__」「深__」「淺__」「__透了」「__的」「__了」「__着」「發__」「__得」「比××還__」の 12 項目の環境を設定し、「黒、白、紅、黄、綠、藍、紫、青、灰、粉、紅、棕色、碧綠」の 12 語について、それらの生起の状況を調べている。この結果、「黒、白、紅、黄、青」の 5 語が基本的な色彩語彙と考えられるとしている。しかし「青」が「藍」と「綠」に分化しているため、「青」の代りに「藍」「綠」の 2 語を加えて BCT を 6 語とし、B&K の第 5 段階に相當するとも述べている。

大河内は、BCT の分類に文法的な視點を取り入れたという點で先驅的であり、「青」の特殊な地位を指摘した點も評價できる。ただ B&K 假説を参考にしながら、B&K が行った漢語の BCT の選定及び BCT の基準、独自の漢語の BCT の試案やその階層性についての踏み込んだ言及がなされていない點、また 1 形態素の語と 2 形態素の語が同じレベルで検討されているなど、やや嚴密性に欠ける點が惜まれる。

このほか Caskey-Sirmons & Hickerson 1977 は、B&K の調査における二言語併用の影響を指摘しつつ、BCT として「紅・黄・綠・藍・白・黒・灰」を挙げている。

以上は B&K の假説をめぐって行われた議論であるが、劉鈞杰 1985 はこれらの動きとは全く無關係に考察を行っている。劉は色彩語彙が指示物として具體

的な事物を指すか否かという視点から、色彩語彙を、まず①純粹色彩語（例えば「紅」と「紅紫」のように、單獨の形態素からなるものと形態素が複合しているもの⁽⁶⁾）と②物質色彩語（例えば「橙色」のように何らかの具体的な事物も指示するもの）に分け、更に③上述①と②の複合（例えば「米黄」）および④純粹色彩語の生動形式（例えば「紅通通」のようなABB式など付加的要素があるもの）の区分を立てた。

「純粹色彩語」は、B&KのBCTとはやや異なるが、單一形態素であり、具体的な事物を指示しないことなどから、大筋ではBCT的なものと考えてよいであろう。この「純粹色彩語」には「黄・白・黒・紅・緑・藍・青・紫・灰・褐」の10語が分類されている⁽⁶⁾。その理由は①色彩語彙として歴史的に安定している、②出現頻度が高い、③物質名詞と結合するなど生産性が高いことである。

また上で問題となった「灰」については、物質の「灰燼」も指示することを指摘しながらも、色彩語彙として常用され、また文脈次第で色彩だけを指示することから、「純粹色彩語」として認めてよいとしている。この点はB&Kおよび大河内の「灰」の扱いとは異なっている。ともかくも、この主張が、漢語を母語とする研究者によってなされていることに注意したい⁽⁷⁾。

またB&Kをはじめ、やや早い時期の調査では「灰」がBCTとして認められないことも考えあわせると、「灰」がBCTになったのは比較的最近であるとも推察できるのである。いずれにしても「灰」はBCTと2次の色彩語彙の境界線に位置しているのであろう。

結局のところ、「白・黒・紅・緑・黄・藍」がBCTであることについては見解が一致している。一方「灰・紫・褐・青」の扱いについては、一致した結論には達していない。これは、色彩語彙体系内で「白・黒・紅・緑・黄・藍」がBCTとしては典型的・中心的地位を占めているのに對し、「灰・紫・褐・青」は周縁的な地位にあることを示していると考えられる。そこで次に、上述した問題點に留意しつつ、筆者の調査結果について考察を進めたい。

2. 漢語の色彩語彙

2.1. 調査方法

調査は次のような方法で行った。

①インフォーマント自身が最も頻繁に使用する言語(方言)で、色彩語彙と考えるものを挙げてもらう。このとき、BCTと考えるものも指摘してもらう。これはB&Kの基準④に相當する。

②次に色見本をインフォーマントに示して、それぞれの色片の名稱を回答してもらう。使用した色見本は230色の『標準色カード230』(補足調査では110色のものを使用、共に日本色研事業株式会社編)である。これらにはマンセル記法に基づいたJIS色記號表示が付されている。

③上記①②の調査によって得られた語彙を形態素に分析する。得られた回答には「色兒(shǎir)」または「色(sè)」がついていることが多いが、この分析はこれらの付加成分を取り除くためでもある。そしてこれらの形態素が、自由形式(free form)として單獨で使用可能か否かを實際の文の中で吟味する。つまり異なった文脈でそれぞれの形態素の現われ方を調べ、その文法機能の相違から色彩語彙の階層性を探り、BCTを確定する一つの基準としたい。より典型的な色彩語彙はより多様な文法的な環境に現われるのではないかと考えたからである。

インフォーマントには北京市出身の劉宗承、および内蒙古赤峰近郊出身の江新興の2氏になっていただいた。調査の時點では兩氏とも20後半の漢族男性で、日本滞在は4年ほどになる。日本語の能力も日常生活では何ら支障はない。また、文法的特徴についてあとから補足した調査では北京市出身の郭雲輝氏(女性)にインフォーマントを依頼した。郭氏も滞日は6年と長い。したがって、注意しなければならないのは二言語併用の影響である。しかし、今回の調査では、語彙項目の抽出が目的であり、マトリックス上に色彩語彙の指示對象の分布を表示するのが目的ではないこと、また3氏は少なくとも20代の初めまでは中國で成長したことなどから、二言語併用であることは、結果に大きく影響しないであろうと考えた⁽⁶⁾。調査は面接方式で、1992年の7月と8月に2回ずつ、また補足調査は1994年8月に行った。

2.2. 調査結果

調査の結果、インフォーマントの間で一致する語として「黒・白・紅・藍・黄・綠・灰・青・紫・粉・褐」の計11語が得られた。そして、これらの語の文法的特徴を具體的な環境の中で確認した。インフォーマントには、問題なしと

考えた場合は「○」、許容できるがやや不自然と考えたものは「△」、不自然と考えたもの、あるいは該当する表現が存在しないものは「×」で回答してもらった。そして、これらを便宜上それぞれ「○」= 2 点、「△」= 1 点、「×」= 0 点として数値化した。この数値化はインフォーマントそれぞれの回答について行い、その合計をそれぞれの項目について表 1 に示しておいた。したがって全てのインフォーマントが許容した項目の合計は 6 点となり、許容の程度が異なる項目は 6 点未満の数値となる（なお追加補充した⑫～⑭の 3 項目は最大合計 2 点）。

調査項目としては次の 15 項目を設定した。

①「__色 (sè)」と②「__色兒 (shàir)」の 2 項目であるが、これは口語的な環境で使用可能か否かを判断するためのものである。前者は文章を読む場合にも使用できるやや硬い表現、後者は口語でのみ使用できる「兒化」を伴った表現である。

③「__布」と④「__布料」であるが、これは共に定語となるか否かを判断するものである。被修飾語を単音節語と 2 音節語にしたのは、被修飾語の音節の違いによって、全体の音節のバランスをとるために定語に変化があるか否かを調べるためである。

⑤「發__了」と⑥「變__了」は、共に結果補語についてである。前者の「發」は、ある変化の結果自然にある状態になること、一方「變」は、単にある状態や性質に変わることと解釈できる。

⑦「__的」は重複形を作ることができるか否か、つまり状態形容詞であるか否かを調べるためである。⑧「那張紙是__的」は的構文で使用できるか否かである。

⑨「很__」⑩「非常__」⑪「不__」⑫「太__了」⑬「特__」などは掛かる副詞による違いを調べた。

⑭「我喜歡__」は単獨で賓語となるか否かを調べたがこれは全て「×」であった。また⑮生動形式については、表 1 の「黒」～「棕」について『漢語大詞典』を用いて調べた。その結果は「黒」60 例・「白」33 例・「紅」14 例・「藍」3 例・「黄」24 例・「綠」14 例・「灰」12 例・「青」8 例・「紫・粉・褐・棕」0 例であった。これらの例数は 0～10 を 1 点・11～20 を 2 点・21～30 を 3 点・31～40 を 4 点・41～50 を 5 点・51～60 を 6 点として数値化した。

以上のような手続きの結果、語彙群は大略「黒」～「粉」とそれ以外の語に分けることができる。更に「黒」～「粉」については「黒」～「緑」とそれ以外の2つに大別することができる。前者「黒・白・紅・藍・黄・緑」の現われる環境はほとんど一致し、インフォーマントの自己報告の語彙項目の中にも全て出現している。またこれら6語は先に言及した先行研究の結論とも一致する。したがって、これらの色彩語彙は、インフォーマント相互間で安定し、また文法機能上でも差異がないため、BCTと考えると差し支えない。

次に問題のあるものを検討したい。なお、「駝色・米色」など明かに物質名を色彩名稱に轉用したことが分かるものは検討の対象から除外する。

2.2.1 「灰」

「灰」は上述した「黒・白・紅・藍・黄・緑」とほぼ同じ文法的特徴を持っている。特に生動形式であるABB式(灰溜溜・灰蒙蒙など)の語を構成するなど、生産性の面でもこれら6語と大きな違いはない。ただし⑨～⑬については、数値が3～0で、インフォーマントの間での許容の差が大きいことがわかる。合計の点数も57であり、前6語と10点以上の開きがある。また大きな相違点として、具体的な物質である「灰燼(ash)」を指示する点が挙げられる。恐らく「灰」は色彩語彙としての歴史がまだ浅いため、現時点でもなお両方の意味を持ち、その意味の選擇は文脈に依存しているのである⁽⁹⁾。しかし、単語は常に文脈を伴って用いられるので、「灰」を物質の「灰燼」と混同することは回避できよう。したがってBCTとして扱うことも差し支えないと思われる⁽¹⁰⁾。

2.2.2 「紫」

「紫」を「灰」と比較してみると、「灰」は合計の点数が57であるが「紫」は54である。これはまず⑮生動形式の例が0であることが大きい⁽¹¹⁾。また①～⑩についてインフォーマントの合意が得られていない項目が、「灰」は4項目であるのに對し、「紫」は6項目である。いずれにせよ、上で検討した「黒・白・紅・藍・黄・緑」および「灰」に比べて生産性はかなり制限されたものであるといえよう。ただ⑨～⑬に見られるように、「紫」は「灰」よりも現われる環境が広いといえる。しかしながら、合計点数と合意を得ている項目数を重視した場合、「紫」は「灰」よりもコード化の程度が若干落ちるといえよう。現段階ではBCTの周邊的な地位を占めているものとして扱っておきたい。

その他の細かな相違点としては、「淡」が修飾成分として付く場合「色 (sè)」が付加しなくてもそのまま成り立つという見解と、「色」が付加しなければ成り立たないという見解があった。「色」を後置して拘束形式 (bound form) としてしか機能しないものは、当該の色をその属性として持っている物質を同時に指示する可能性があり、B&Kの基準⑥に抵触する。しかしこの場合「紫」の指示対象としては色彩の他に何らの具体的な指示物も見当たらない。恐らく、「紫」が口語としてこなれていないのであろう。またこのような相違点は方言差、または個人語 (idiolect) 間の微妙な誤差と考えることもできる。

2.2.3 「粉」

「粉」は、表1に見られるように、①～⑩についてインフォーマントの合意を得られていない項目が5項目存在し、合計は55である。点数のみでは「紫」とほぼ同じ傾向を示す。しかし個々の回答は微妙に異っている。つまり、⑨～⑩について2氏が全て不自然であり、述語としての機能はないとするのに對し、1氏は問題ないとしている。「黒・白・紅・藍・黄・緑」および「灰・紫」と比べて、非謂形容詞としての性質についてインフォーマント間に大きな違いがあるわけである。また、「_布」という環境については、とりあえず許容できるが、不自然な場合もあるとする見解と、「粉布兒」というように、兒化した表現になるとする見解があった。これらの現象にも方言差や個人差が絡んでいることが感じられる。

ところで「粉」は「粉末」あるいは「化粧用的粉末」という具体的な物質を指示物として持っている。この点は「灰」が「灰燼」という指示物を持つことと同じである。そのためであろうか、今までの研究者は「粉」を色彩語彙とは考えてこなかったようである。少なくとも上で言及した先行研究の色彩語彙のリストには「粉紅」は存在しても、「粉」そのものは登場しない。または神谷1993のように、「白みがかった」あるいは「桃色がかった」ことを表わす「中國の色名獨特の色相の形容詞」と考え、色彩語彙とは考えていない。上述のように「粉」はBCTとしての地位は不安定で、「紫」と同様に周邊的な部分に位置している。しかし文法的な特徴は次に述べる「褐」よりもむしろ「紫」に近い。したがって、カテゴリーとしては「褐」よりも安定したものではないかと考えられる。

2.2.4 「褐」

「褐」は、多くの點でインフォーマント間で回答が相違した。1氏は大部分問題なしとしたのに對し、2氏は大部分を否定したのである。一致して問題なしとした項目は②のみである。合計點數も22と他の10語彙に比べて格段に落ちる。結論から述べれば、「褐」は「紫」や「粉」よりも更に周邊に位置しており、もはやBCTとは認められない。

「褐」の特徴は次のようにまとめられる。まず「褐色兒」のように兒化した場合、若干の不自然さが伴う。そのため口語的と言うよりは文章語的な語である。また「色」が伴わなければ使用できない場合が多く、他の10語彙に比べて格段の制約がある。したがって「褐」は拘束形式としてのみ機能すると言える。

2.2.5 「青」

「青」は、①～⑩についてインフォーマントの合意を得られていない項目が4項目で「灰」と同數、また合計點數は59で「灰」よりも高い。したがって、文法的特徴からのみ判断すれば、「青」はBCTであるといえる⁽¹²⁾。

しかし北京方言では、「青」は單獨で色彩を積極的に指示することがなく、日常生活で色彩語彙として用いられることもないという。つまり「青山」や「青天白日」などといった拘束的な熟語や慣用句以外では、「青」は口語から次第に消えつつあるといえる。一方赤峰付近の方言では、自由形態素として存在している。しかし、表2に示したように、その積極的な指示領域は「黒」に包攝され、指示対象は主に布製品の色（例えば「青衣服」や「青鞋」）に限定されている。このように口語から驅逐されるか、あるいは指示対象が制限されるかして、「青」は次第にその指示領域を縮小しつつあるともいえるであろう。北京ではその程度が更に進んでいるといえる。

『現代漢語詞典』を参照すると、「青」は「①藍色或綠色，②黑色，③青草或沒有成熟的莊稼」のように説明されている。したがって「青」の最大指示領域は暗寒色帶全部であり、「藍・綠・黒」の3つのカテゴリーを包括しているのである。とすると「藍・綠・黒」はB&KのBCTの基準②「ほかの色彩語彙に含まれない」に抵觸することになる。

ところでMacLaury 1991はメキシコのTzeltal語とTzotzil語について調査研究を行い、漢語の「青」と類似の例を報告している。例えばTzeltal語では、

複数のインフォーマントについて black—green—blue の暗寒色帯を包括する単一のカテゴリーから black/green—blue, そして black/green/blue という3つのカテゴリーの分立までの3段階が存在するが、これらのどの段階のカテゴリーを選択するかは主として話者が対象の類似性に注目するか相違性に注目するかにかかっているという⁽¹³⁾。とすれば、色彩に言及する場合、官話の話者は類似性よりも専ら相違性に注目しているため、「青」よりも「藍・緑・黒」がBCTとして選擇される結果になるといえる。したがってインフォーマントのBCTの自己報告には「青」が含まれず、またこの場合B&Kの基準②も消極的なものとならざるをえない。

歴史的には、「青」は五行思想において東方の正色とされており、かつては一つの安定した基本的カテゴリーであった。しかし時代が下るにしたがってその領域が分割されて「緑」や「藍」で指示されるようになる。そして「青」は古語や熟語などの中にその痕跡を残しつつ、また「緑」や「藍」の背後に潜在しつつ、「青」の積極的な指示領域は本来の領域の周縁部分に移動し、やがてそれすらも「緑」や「藍」の背景になってしまったと考えられる。その結果、赤峰付近の方言では「黒」の領域と重なる部分に縮小し、適用できる対象も限られてしまったと考えられる。同様の現象は粵語廣州方言でも觀察される（遠藤1994b）。廣州方言では「青」の出現は少なくとも、北方官話に比べて残存の程度が高い。そして、その指示領域は北方官話の「緑」と「灰」の領域の一部と重なりあっているのである。

2.3 結論

表1の合計点数を一つの基準とすれば、「黒・白・紅・藍・黄・緑」は疑いなくBCTであるといえる。これはいわば狭義の解釋である。そしてこれらに続く語として「灰・紫・粉・青」が擧げられる。しかしこれらの性質は一樣ではない。まず「青」は「藍・緑」あるいは「黒」を包括するカテゴリーであるが、これら3語よりも明らかに顯著性に缺ける。また「紫・粉」には生動形式の例が見られない。特に「粉」はその他の文法的特徴についてインフォーマントの間で見解が別れている。したがって、もしBCTの範囲を広げるのであれば、すでに検討したことから、「灰・紫」をBCTとするのが適當ではないかと思われる⁽¹⁴⁾。「灰」は物質を指示物として持つてはいるが、排除するには文法的特徴

がかなり安定しているといえる。また「褐」はBCTとして今後コード化が豫想される語である。

これらの8語はB&Kのコード化序列では第7段階に相當する。しかし、第6段階で登場するはずの brown に相當する語がまだコード化されておらず、この点ではB&Kのコード化序列に一致していない。

おわりに

これまで述べてきたように、官話の色彩語彙といっても、そのコード化の程度には地域差がある。當然のことながら、その他の漢語方言の間でも同様の違いが認められる。遠藤 1994b に従って粵語廣州方言を官話と比較した場合、次のような違いが指摘できる。まずBCTの枠を広く考えた場合、「灰」がBCTである点は同じであるが、「紫」がBCTとして入ってくる可能性は、廣州方言の方が低いこと、「褐」よりはむしろ「棕」を選ぶ傾向にあること、また「青」の積極的な指示領域が官話とは異なり、官話の「綠・藍・灰」の指示領域の一部と重なることなどである。特に「青」については、そのシフトの方向が他の方言間でも異なることが豫想できる。これは閩語を瞥見してみても窺うことができる(中島1977・1979)。例えば、greenに相當する語を見てみると、閩語東山島方言では「綠色」、潮陽方言では「萑菜色」あるいは「綠色」というように、「色」を伴うか物質名の轉用として記述されている。ちなみに「烏・白・紅・藍・黃」などは「色」を伴っていない。記述の基準が不明であるので、簡単に結論を出すことはできないが、「綠」のカテゴリーのコード化の程度が官話とは異なることが豫想できる。

ところで、最後に問題にしたいのは「赤」の殘存についてである。周知のように「赤」は五色の成員であり、また上古漢語のBCTと考えられる(遠藤1994a)。それが長い歴史のなかで「紅」に取って替られ、現在では古語となり、「赤」の積極的な指示領域も消滅していると考えられている。管見による限り、官話では本稿で検討したような色彩語彙として「赤」が存在している例は見当たらない。ところで、閩語東山島方言では、brownに相當する語として「赤色」が記述されている。そこで、「青」のシフトの例から、これは古代の「赤」の積極的な指示領域が従來の領域の周邊部分にシフトして行った結果ではないかと考

えたくなる。しかし、これについては、橋本1972の客家語梅縣方言についての次のような記述によって、再考を迫られるのである。客家語にはredに相当する語として「紅」がある。一方「赤」という語も存在している。しかし「赤」は「はだかの肌の色から来たたとえの色名で、fugとは性格がことなる」もので、それは「陽にやけた肌の色、はげ山、ぶた肉の赤身、牛、犬など」を指示するといっているのである（p.85）⁽¹⁵⁾。もちろん閩語と客家語は異なるため、一概に「赤」の残存を否定はできない。しかし、東山島方言の「赤色」を輕輕に古代の「赤」の残存と見なすわけにはいかないであろう。またこの場合これが「色」を伴っている點もやや氣になるところである。この問題についてはデータの蓄積が不十分であるため、今すぐ結論を出すことはできない。ともかくここでは「赤」残存の可能性を示すことに止め、本稿の結びとしたい。

末筆ではあるが、忍耐力の必要なインタビューに快く、しかも無償で應じて下さった劉宗承・江新興・郭雲輝の3氏に、また本稿完成までさまざまな意見を寄せて下さった諸先生諸先輩の皆様我心から謝意を表したい。なお僭越ながら文中敬稱を省略した。何卒お許し願いたい。

注

- (1) B&KはBCTの基準を定め、それ従って98言語の色彩語彙を調査研究し、その結果主に次のような普遍性が存在すると考えた。まずBCTは最少で2語、最多で11語という制限があること、BCTの増加の仕方には一定の順序がある、即ち一定のコード化序列に沿っていることなどである。詳しくは遠藤1994aのほか、長野1982・松井1991などを参照。
- (2) 官話について、B&Kは色見本を用いた実験的調査を行っている（彼らが調査したインフォーマントは、ほとんどがロサンゼルス在住の英語との二言語併用者であるが、そのため焦點の普遍性などに二語併用の影響があることがHickerson 1971により指摘されている）。B&K 1969は、この調査資料の他に、参考資料としてMcClure(n.d.), Madaraz(n.d.)を挙げているが、未公開のため筆者は未見。
- (3) 注(1)参照。
- (4) 例えば柴田1980などでは、日本語の基本的な色彩語彙を、音韻の特徴の他に語尾の活用という形態論的特徴に基づいて「アカ(aka)・アオ(awo)・クロ(kuro)・シロ(siro)」とする。また、Kim 1985は、B&Kの朝鮮語のBCTの決定について、形態論的特徴を考慮して固有語と借用語を区別すべきであると主張している。
- (5) 劉は純粹色彩語について、例えば「紅」が「性質形容詞」であり「紫」が「非謂

形容詞」であるというような相違点を認めながらも、文法構造まで考慮する必要はないとしている。これは、この研究の主旨が漢語を母語としない人々への漢語教育にあるからであろう。

- (6) 同様の語彙項目は神谷1993にも見られる。また劉は、このほかの純粹色彩語に、文章語に限られた古語として「赤・丹・朱・絳・緋」を挙げている。
- (7) 「灰」については、興味深い事象が上述の Caskey-Sirmons & Hickerson 1977 によって報告されている。この研究は B&K の議論で問題とされた二語併用の影響を明かにすることが目的であるため、インフォーマントには二言語併用者と一言語話者の両方を扱っている。注目すべきは、一言語話者が grey に相当する語として「tan hei (淡黒)」(ローマ字表記は出典に従う)を選択した一方で、二言語併用者は「灰」を選択していることである。したがってこの場合、「灰」の BCT のとしての地位は、英語の影響によって確立したことも考えられるのである。
- (8) Caskey-Sirmons & Hickerson 1977 で報告された「灰」のように、基本色彩語彙の成立に母語以外の言語の影響があることは當然豫想されるし。たがって、その影響をできるだけ回避するために、中國国内で日常的に使用していた方言で回答するようインフォーマントに努めてもらった。
- (9) 歴史上では色彩語彙としての「灰」が、同音の「黶」で表記されている例がある。管見によれば、「黶」の最も早い登場は宋代の『大廣益會玉篇』においてであるが、これには「呼恢切」という反切だけが記されていて、意味が記されていない。意味が記されているものでは、金代の韻書である『五音集韻』(金・韓道昭撰、宋慶元 [1212] 年刊)に「黶、黑色」と記されている。これは字形によって物質名稱と色彩名稱を意識的に區別しようという姿勢の現われであろう。このことから色彩語彙としての「灰」は、遅くとも宋代に始まり、徐々に定着したといえる。また、「黶」という字形から、「灰」は當時「黒」の下位カテゴリーであったと考えられる。
- (10) 官話の「灰」を BCT と認めなかった B&K も、英語の「orange」や「pink」(ナデシコ)を BCT として認めている。
- (11) 劉伶 1988 は敦煌方言について「紫微微(兒)的」(紫得好看)という表現を報告している。
- (12) 大河内1982で、「青」を BCT であるとした結論は、主に「青」の文法機能を重視したためであろう。
- (13) 日本語についても同様のことが言える。歴史のなかで「アオ」の領域から「ミドリ」の領域が分割されるようになる。しかし植物の葉や信號の「進め」の合圖の色について今日でも「アオ」ということがあるように、「アオ」は完全に「ミドリ」の領域から排除されたわけではなく、その背後に潜在しているといえよう。杉山 1980 では、この「アオ」から「ミドリ」が分化して行く過程が、世代差として示されている。
- (14) このような BCT の範囲の曖昧さも、MacLaury 1991 が主張する話者の基本カテゴ

リーに対する好み (preference), つまり類似性を重視するか相違性を重視するかで説明できると考える。

- (15) brownに相當する語としては「茶色」あるいは「泥色」という語が報告されている。

参考文献

- 遠藤雅裕 1994a 「古代中國語の色彩語彙」『中國語學』241：126-136。
 1994b 「粵語廣州方言の色彩語彙體系（試論）」『中國語學研究 開篇』12（現在印刷中）
- 王 曙光 1986 「『紅』の話」『中國語研究』26：22-30。
 大河内康憲 1982 「中國語の色彩語」『日本語と中國語の對照研究』7：32-57。
 神谷 修 1993 「中國の色名について」『言語文化論集』xv-1：191-210。
 柴田 武 1980 「ことばにおける構造とは何か」『講座言語1・言語の構造』大修館書店：5-41。
 新村 出 1942 「色彩空談」『東亞語源志』荻原天文館：239-247（初出：『教育學術界』8-6, 1904）。
- 杉山貞夫 1980 「基本色名の概念に見られる性差, 世代差, および民族差に関する研究」『關西學院大學社會學部紀要』40：353-370。
 中島幹起 1977 『閩語東山島方言基礎語彙集』東京外國語大學アジア・アフリカ言語文化研究所。
 1979 『福建漢語方言基礎語彙集』東京外國語大學アジア・アフリカ言語文化研究所。
 長野泰彦 1982 「色彩分類」『現代の人類學①認識人類學』（現代のエスプリ別冊）至文堂：107-136。
 橋本萬太郎 1972 『客家語基礎語彙集』東京外國語大學アジア・アフリカ言語文化研究所。
 松井 健 1991 『認識人類學論攷』昭和堂
 湊 幸衛 1980 「中國の色と日本の色」『漢文教室』134：1-4。
- 符淮青 1988 〈漢語表“紅”的顏色詞群分析（上）〉《語文研究》28
 1989 〈漢語表“紅”的顏色詞群分析（下）〉《語文研究》30
 漢語大詞典編輯委員會・漢語大詞典編纂處
 1986~93 《漢語大詞典》1~12 漢語大詞典出版社
- 劉鈞杰 1985 〈顏色詞的構成〉《語言教育與研究》1985-2：71-77。
 劉 伶 1988 《敦煌方言志》蘭州大學出版社
 中國社會科學院語言研究所詞典編輯室
 1983 《現代漢語詞典》商務印書館
- Berlin, Brent. and Poul Kay

1969 *Basic Color Terms: Their Universality and Evolution*. Berkeley: University of California Press.

Caskey-Sirmons, Leigh A, and Nancy P. Hickerson

1977 Semantic shift and bilingualism: Variation in the color terms of five languages. *Anthropological Linguistics* 19(8) : 358-367.

Hickerson, Nancy P.

1971 Review of Basic Color Terms. *International Journal of American Linguistics* 37(4) : 257-270.

Kay, Paul

1975 Synchronic variability and diachronic change in basic color terms. *Language and Society* 4(3) : 257-270.

Kim, Andrew I.

1985 Korean color terms: An aspect of semantic fields and related phenomena. *Anthropological Linguistics* 27(4) : 425-436.

MacLaury, Robert E.

1991 Social and cognitive motivations of change: Measuring variability in color semantics. *Language* 67(1) : 34-62.

表 1

環 境	黑	白	紅	藍	黃	綠	灰	青	紫	粉	褐	棕	藕荷	橙	水
①_色兒	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	4	2	4	2	2
②_色	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	4	4	4	4
③_布	6	6	6	6	6	6	6	6	5	6	2	2	2	0	0
④_布料	6	6	6	6	6	6	6	6	5	6	2	1	2	0	0
⑤發_了	6	6	6	6	6	6	6	6	6	5	2	2	0	0	0
⑥變_了	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	2	2	0	1	0
⑦__的	6	6	6	6	6	6	4	6	4	5	2	2	0	0	0
⑧那張紙是__的	6	6	6	6	6	6	6	5	6	6	2	2	0	1	0
⑨很__	6	6	6	5	6	6	3	3	3	2	0	0	0	0	0
⑩非常__	6	6	6	5	5	5	3	4	2	2	0	0	0	0	0
⑪不__	6	6	6	5	6	5	3	3	2	2	0	0	0	0	0
⑫太__了	2	2	2	1	2	2	0	0	2	2	0	0	0	0	0
⑬特__	2	2	2	2	2	2	0	1	1	1	0	0	0	0	0
⑭我喜歡__	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
⑮生動形式	5	4	2	1	3	2	2	1	0	0	0	0	0	0	0
合 計	75	74	72	67	72	70	57	59	54	55	22	17	12	8	6

表 2

番 號	マンセル記號	赤峰第 1 回	赤峰第 2 回	北京(劉)
30	4R 2.0/1.5	青色／黑色	青色／黑色	黑
57	8Y R 2.5/1.5	青色／黑色	鐵青色	黑
85	5Y 2.5/1.5	青色／黑色	黑色	黑
120	3G 2.0/1.5	青色／黑色	黑色	黑
156	3P B 1.5/1.5	黑色	黑色	灰／黑
168	9P B 8.0/2.0	青色／黑色	青色／黑色	黑
186	7P 3.5/2.0	紫灰色	紫青色	深灰／灰黑
187	7P 1.5/1.5	黑紫色	黑色	黑
200	3P B 8.5/1.0	黑青色	白紫色	灰／綠灰
216	N 3.0	黑鉛色	黑色／鉛色	黑／黑綠
223	N 1.5	墨色	青色／黑色	黑
224	N 2.0	黑色	黑色	黑
226	4Y R 2.0/0.5	淡藕荷色	黑色	黑
227	5Y 2.0/0.5	鉛色	黑色	黑
229	3P B 1.5/0.5	鉛色	青色／黑色	黑／深的墨綠
230	7P 1.5/0.5	鉛色	黑色	黑